韓国の国史科教科書に見る日本史(2)

清　田　善　樹

A Consideration of History Textbooks in Korea(2)

Yoshiki Kiyota

Summary

In this paper, I examined the description about Japan which is written in historical schoolbook of Korean junior highschool. It describes as a nation which accepted the superior Korean culture, and it dosen't refer to the economic relation between prehistorical and ancient Korea and Japan sufficiently. Moreover, political, diplomatical and military relations are ignored. Though the batter at Pek-Chon-Gang (白村江) was one of great events in ancient Korea, her schoolbook keeps silent.

I suppose that the reason why her schoolbook treats Japan so coldly is due to Japanese cruel colonial rule before the World War II.

Received Nov. 15, 1988

Key words : Korea, Historical Schoolbook.

は　じ　め　に

前回は，韓国における教育制度の中での歴史教育の位置付とその教育目標等について概観した。本稿においては，中学校用の国史科教科書の中で，日本の歴史がどのようなものとして記述されているか，具体的に記述内容に即して検討する。

現在，韓国の教科書の翻訳書が，何種類か刊行されている[1]。本稿が依拠したのは1987年版であるが，今までに日本語に翻訳された国史の教科書は，1976年版ならびに1981年版の二種類である。1976年版，1981年版，1987年版の三つの版の国史科の教科書は，それぞれ内容が少しずつ違う。最も違いが大きいのは，1976年版と1981年版との間に見られる違いである。1981年版と1987年版との間は，1976年版と1981年版との違い程ではないが，少し記述の体裁が異っている。実は，1981年版の教科書はその後改訂作業が行われて，1982年以降は改訂版が使用されていたのである[2]。1987年版教科書の奥付には「1982年３月１日初版発行，1987年２月15日印刷，1987年３月１日発行」と記されているので，現行教科書は1982年改訂教科書の流れを汲むこと明瞭である。

ところが改訂版が発行されてから半年も経たぬうちに，所謂「教科書問題」が起こり，日本の歴史

教科書の記述のあり方に対して，アジア諸国から激しい批判が浴びせられた。この時，韓国においても日本に対する抗議運動が起こり，両国間の外交問題にまで事態が発展する騒ぎになったことはまだ記憶に新しい。韓国では，この「教科書問題」を契機として，日帝支配時代を中心とする歴史教育の見直しが行われることになったが，それは学校教育の場だけに限るものでなくて，社会教育の場においても実施されることとなったのである。

その一環として，ソウルの南方に位置する忠清北道天安市に独立記念館が建設され，「教科書問題」から5年後の1987年8月15日に開館した[3]。また当時の新聞報道によれば，「教科書問題」が起った年の二学期からは，歴史教育の重視のあらわれとして「日帝侵略教育」の強化と教員の研修がおこなわれることになったという[4]。

したがって，本稿で考察の対象とした1987年版の国史科教科書の記述内容は，1982年の改訂版からさらに変更された可能性が考えられるのである。しかし残念ながら，そのような記述の変更があったのか否かは確認できなかった。予断を持つことは厳に慎しむべきであると考えるが，韓国における現行の教科書については以上のような事情も考慮しておかねばならないであろう。

第1章　中学校『国史』（上）

第1節　体 裁 と 構 成（前回）

第2節　先　史　時　代

先史時代の記述は，次の様に構成されている。

Ⅰ．わが国の歴史の黎明

1．先史時代の生活

2．古朝鮮の建国と社会の発展

はじめに，この教科書の記述スタイルを説明しておく。各単元の前には「世界とわが国」と題する世界史的概観が述べられ，世界を「わが国」「東アジア」「南アジア」「西アジア」「ヨーロッパ」の5地域に分けたきわめて簡単な略年表が掲げられている。この略年表は，ことさら韓国史のみを詳細に表わすようなことはしてなくて，同時代の世界史との関連のおおよそが見てとれるようにしてある。例えば「東アジア」の項の日本について見ると，「大和朝廷――奈良――平安」と言うように大雑把なものである。1976年版の教科書では，韓国史に関する事項と年代とが，世界史の事項と比べると，かなり詳しく記されていたので，この点に変化が認められる。

各節のはじめには，その節で学ぶべきことがらを要約した「学習概要」と数題の「学習問題」がおかれている。各節の中は，例えば「1．先史時代の生活」では「先史時代の東アジア」「旧石器時代の生活」「新石器文化のはじまり」といったゴシック体の見出しがついた小単位で構成されている。

次に「1．先史時代の生活」の節の学習概要と学習問題を例として示しておく。

〔学習概要〕

われわれの祖先たちは，満州と遼西地方および韓半島を中心に，旧石器・新石器・青銅器・鉄器の各文化段階を経ながら発展してきた。旧石器時代は今から約50万年以前に形成され，新石器

時代は約6千年前に形成された。

新石器時代人たちは，主として岸辺で生活しながら，漁撈と狩猟，採集経済生活をし，原始農業生活もおこなった。新石器時代の代表的な遺物は櫛目文土器である。その後、紀元前10世紀を前後して青銅器文化が成立したが，この時代の人間たちは主として低丘陵地帯に住んで，農業を主業にして，無文土器を製作，使用した。

文化が発展して農業が普及して以来，社会生活にあっても大きな変化が起った。

〔学習問題〕

1　先史時代の遺物にはどのようなものがあり，それらは生活にどのように利用されたか。

2　わが国の旧石器，新石器時代の主要遺跡はどこか。

3　わが国の青銅器文化はどのように成長したのだろうか。

4　青銅器の使用は，社会にどのような変化を与えたのだろうか。（P 3）[5]

各節の末尾には，学習問題に対応する「学習整理」がその節のまとめとして配されている。学習問題と学習整理の項目数は一致しないことが多い。

〔学習整理〕

1　わが国の旧石器時代は，屈浦里・石壮里・コムンモル洞窟・チョムマル洞窟・全谷里などの地の遺物で推量してみると，約50万年以前からはじまったことがわかる。

2　新石器時代は約6千年前にはじまり，この時代を代表する土器は櫛目文土器である。

3　青銅器時代は，紀元前10世紀前後にはじまり，無文土器がつくられるようになって稲作農業がはじまった。

4　わが民族の基盤は，無文土器をつくって使用した人たちが中心になって形成された。

5　青銅器時代になると，社会が大きく変化して，少しずつ国家生活がはじまった。（P10）

1．先史時代の生活

先史時代の記述においては，当然のことであるが，日本に関する言及はきわめて少ない。「日本」という語は，「先史時代の東アジア」という項の東アジアにおける氷河期の説明の中で，

したがって，当時は韓半島に済州島・対島・日本等が連結していた。しかし，氷河期の末になって，氷河が融けて海水面が高くなり黄海が生じてくると，日本は大陸から離れて行った。（P 4）

という形であらわれる。先史時代において日本に言及したのはこの部分のみである。氷河期に東アジア一帯が陸続きであったことを示す挿図が添えられているが，日本の教科書がナウマン象の化石の発掘や日本列島への人類の移動など具体的な例を示しているのに比べると，素気無い印象をうける。ともあれ，日本はもともと大陸と接続していたものが，氷河の融解による海水面の上昇によって大陸から分断されたわけである。

日本に関する記述は以上のとおりであるが，日本人としての目でこの教科書を見る時，われわれ自身の歴史を見る目について考え直さねばならないと思うことがいくつかわいてくる。本稿は，日本の

歴史がどのようなものとして韓国の教科書に記述されているのか，ということを見ようと意図したものである。ところが，どのように記述されているかではなくて，何が記述されていないか，という点にも注意を払うべきであると思うのである[6]。

この単元で言えば，先史時代の東アジアにおける文化の広がりに関する記述がその一例である。新石器時代の代表的な遺物であるとされている櫛目文土器は，日本の縄文式土器と密接な関係があると日本の考古学者に指摘されている[7]。ところが，櫛目文土器を伴う文化の広がりについては，全く言及されていないのである。これは，高等学校用の教科書においても同じである。

実は，櫛目文土器に関する日本の教科書の記述については，李進熙氏が10年程前に次のように発言しているのである[8]。すなわち，戦後の研究によって，日本も朝鮮[9]も旧石器文化の研究は進んだが，当該時期は朝鮮半島と日本列島とは陸続きであったのだから，日本の旧石器文化を考えるには，中国やシベリアとよりも朝鮮のそれとの関連性がより大切である。後氷期に入って朝鮮海峡ができると，それが障害となって弥生時代の開始まで往来が閉されたと考えられてきたが，それは不当であって，朝鮮の櫛目文土器，西日本地方の縄文土器との比較研究によって，すでに縄文早期から日本と朝鮮との間に往来のあったことが明らかである。だから「これらは，近年の研究で明らかになったことだが，今後の教科書には当然反映させねばならない」というのである。

李氏は，日本の高校用日本史教科書はことさらに朝鮮史との関わりを軽視しているといわれ，その一例として櫛目文土器を取り上げたのである。日本最古とされる土器は，縄文早期よりもさらに古いものであって，その起源や大陸文化との関係も未だ明らかでない部分が多い。しかし，旧石器や縄文早期・前期の土器等に見られる両地域間の文化交流[10]の事実については，全く李氏の言われるとおりだと考える。櫛目文器や石器などのような，両地域に共通した手法で製作された遺物を教材として取り上げるならば，「日本」「韓国」「北朝鮮」などという現状の国家の領域を以って文化を区分することは，学問的にはあまり意味を持たないであろう。「国史」の「国」はあくまでも現代の国である。縄文時代には現代のような「国」はなかったのである。「教科には当然反映させねばならない」のは，日韓双方の教科書に言えることなのである。韓国の教科書から落ちた視点は，日本の教科書からも落ちているのであって，この点日本の教科書執筆者は注意深く配慮しなければならない。

この問題と関連して，韓国の教科書で使用される「国家」「民族」という用語についても，一言述べておきたい。前回も指摘した如く，国家・民族という用語がこの教科書では多用されている。「新石器文化のはじまり」で，「わが国の新石器時代は，約6千年前からはじまった」（P5）というときの「わが国」はいうまでもなく現在の国，つまり韓国が現実に支配している領域内と支配が及ぶべきであると主張している領域内のことである。しかし，青銅器時代の「社会の変動」において「青銅器時代の人間たちは，前代の文化を吸収して，地域単位の生活をしながら，より発達した社会をつくりだした。このころ，わが民族の基盤が確立され，国家生活もはじまった」（P9）と言うとき，あるいは「学習整理」において「わが民族の基盤は，無文土器を作って使用した人たちが中心になって形成された」（P10）という記述を見ると若干の疑問を感じる。

なぜならば，無文土器を作り使用した人々が一体どんな言語を話していたのか，信仰の具体的内容

や風俗の詳細について一切不明だからである。教科書は「民族の基盤」が確立されたと述べているのであって，民族そのものが確立されたと言っているわけではない。しかし，もう少し慎重な表現が工夫されてもよいのではなかろうか。

また「国家生活」[11]という用語にも少し異和感を覚える。石井紫郎氏によれば，氏が著者で「国家生活」という言葉を題名として採用するにあたって次のように述べておられる。「『国家生活』という言葉は，あまり耳慣れないと思われるが，Staatsleben というドイツ語からとったものである。（中略）『国家生活』という言葉を筆者が使う場合，このように，われわれの『国家』という視点からみた人びとの『生活』，つまり，われわれ一人ひとりが自分の利益と安全をまもるために，大なり小なり政治的な組織をつくりあげていく（一人ひとりのもっている力を統合させていく）様相，あるいは，それを支える思想と行動を指している。[12]」

「国家」という視点からみた「生活」が「国家生活」であるならば，少なくとも「国家」が成立していることを前提としなければ「国家生活」という用語は使用できないのである。単に人間が集住しているとか，氏族社会の構成員の地位に区別が生じたというだけでは「国家生活」と表現すべきではなかろう[13]。

もっとも，日本の教科書でも国家の成立についてきちんと説明しているとは言い難いのであるが。例えば教育出版の『改訂中学社会』では，「むらから国へ」として「稲作によって，人々は，自然のものにたよる生活から，自然に手をかけ，自分たちの求めるものをうみだす生活へと移った。人口もふえ，集落の規模も大きくなった。そして，社会のようすにも変化がおこり，耕作する土地のよしあしや，働き手が多いか少ないかなどによって，豊かな者と貧しい者とが現われ，身分のちがいがうまれてきた」と，一応貧富の差や身分の違いという言葉によって階級の発生について述べている。そして，「有力者のある者は，まわりの集落の人々をも従え，その地位を利用して財産をふやし，やがて，地方の支配者（豪族）となっていった。これらの豪族は，各地に小さい国をつくりあげた」と国の成立を説明している。しかし，ここでいう国は，『後漢書』東夷伝や『三国志』烏丸鮮卑東夷伝に「国」と表現されているのをそのまま使用しただけであって，社会科学用語としての国ではない。史料上に見える用語と学術用語とを厳格に区別しないと，「だいたい『帰化人』というものは『帰化』をする対象としての国家というものがあってはじめて成り立つものであって，その国家主体をつくったものがそれに『帰化』するなどということはありえないはずである[14]」という金達寿氏の指摘に対応できないであろう[15]。

2．古朝鮮の建国と社会の発展

ここでは，檀君神話にもとづく古朝鮮を最初の国家と位置づけて，国家の成立と社会の発展について説明している。国家の成立については，次のように述べている。

> 社会が発展すると，人びとは生活の舞台を丘陵や山間地方に移すようになって，地域的な住居集団生活をするようになった。比較的低い丘陵上に城を築き，住居団のかしらを中心にして，周辺の地域に政治的勢力を広げていった。

このようにして国家が成立したのであったが，初期のありさまは邑落を中心にひとつの政治的社会をつくる形態であって，少しずつ国家に発展していった。その社会を導いていく指導者は，自身を天の子と考えて政治と宗教を支配した。このような国家は諸地域にあらわれて，農業を中心とした経済生活を発達させながら，漸次社会の秩序維持のための法律をつくるようになった。

この時期に成立した最初の国家が，檀君が建国した古朝鮮であった。（紀元前2333）（P12）

この部分は，1981年版教科書ではいきなり檀君の建国神話とその神話がもつ民族の建国思想などの意義が語られている。社会発展の視点が取り入れられたのは，1982年版以降のことらしい。紀元前2333年のことという檀君の建国神話を，建国「伝説」と一応断っているものの，史実として取り扱っている点が気にかかるが，社会発展の視点が取り入れられたことは好ましいことといえるだろう。

古朝鮮は青銅器文化の時代であったが，8条法の中に盗犯に関する規定があるので，すでに個人の財産所有が法で保護される段階に到達していたという。紀元前4世紀頃には，戦乱を避けて中国から鉄器を使用する人々が古朝鮮に移住して来た。この鉄器文化は，紀元前後に半島の南部地方にまで普及していき，三韓諸国の成立を促進した。

この時期における日本との交流についての記述は，すでに鉄器時代に入っていた三韓諸国中の弁韓に関する次の如きものである。

一方，弁韓では鉄がたくさん生産され，これを貨幣として使用することもした。生産された鉄は，楽浪・日本などの地へ輸出した。

日本への鉄輸出の事実を知る根拠は明らかにされていないが，これは『三国志』の「魏書烏丸鮮卑東夷伝」の弁辰条に「国出鉄，韓濊，倭皆従取之。諸市買皆用鉄，如中国用銭，又以供給二郡」と記されているのにもとづくことは言うまでもない。

日本では，弥生時代に青銅器と鉄器を使用する文化を受容した。このことを日本の教科書では，金属器が中国や朝鮮から伝わったとは記してあるものの，それは金属器利用の技術の導入としてであって，鉄の素材が弁韓から供給されたことは触れられていない。62年度用のある教科[16]では，「このころの遺跡から，青銅器や鉄器も発見されている。（中略）金属器は，朝鮮や中国から伝わったが，のちに日本でも鋳直すようになり、その鋳型も発見されている」と述べるにとどまっている。先程引用した烏丸鮮卑東夷伝では，弁辰諸国中の瀆盧国は倭と界を接すと記してあって，その次に「倭人在帯方東南大海之中……」という言葉ではじまる所謂『魏志倭人伝』が続いているのである。

邪馬台国問題については，日本の教科書は各社ともかなりの字数を費して詳しく説明を加えている。『魏志倭人伝』版本の写真を挿図に使用したり，邪馬台国の位置を推定する一つの学説である「放射状説」まで詳しく紹介している教科書もある。それに比すれば，鉄の供給源への関心は余りにも低いと言わざるを得ない。『魏志』の倭人に関する記述は，3世紀段階における，日本の社会の状態や国と呼ばれる集団の分立状況を知り得る，唯一の信頼性の高い文献史料である。また，生徒の興味を引くという点でもすぐれた教材である。しかしながら，「倭人伝」を『三国志』の「魏書烏丸鮮卑東夷伝」の一部分と見るならば，鉄の流通の面から朝鮮半島と日本の交流について，日本の教科書は今少し見直すべきである。鉄の供給については，単なる文化の輸入というにとどまらず，半島との交易という

経済的関係でもあるのだから，このあたりから日本と半島との多様な関係に注意を払っておきたいものである。

第3節　古　　代　(一)

II．三国の形成と発展

1．三国の発展

2．三国の対外抗争と統一

3．三国の社会と文化

1．三国の発展

この単元では，高句麗・百済・新羅の形成と発展の過程が語られる。「三国の発展」の中で，日本との関係に触れているのは「漢江流域の百済」の項である。

馬韓の一小国であった百済は，漸次勢力を養って小国家群中の中心勢力に成長し，古爾王時代に古代王国の姿を備えるようになった。4世紀頃，近肖古王の時に至って，馬韓の南の勢力を征服して，湖南地方を完全に支配下に収め，南は済州島，北は大同江の流域までの領域を支配するようになった。このように百済が隆盛を迎える中で，日本との交渉も生まれる。それを次のように記述している。

> 中国が衰弱した隙に乗じて，遼西・山東地方にまで出て行って，その地方に非常に大きな勢力を形成しつつ，日本の諸地方へも進出して，影響を及ぼしもした。
>
> このように，京畿・忠清・全羅地方と黄海・江原の一部を占めた大きな国となった百済は，中国の南朝と文物を交換しながら，日本に政治的・文化的な影響を及ぼした。（P24）

「日本の諸地方へも進出して」というのは，日本の教科書が「日本と朝鮮や中国との往来がさかんになると，日本に移り住んでくる朝鮮や中国の人々がふえた。これらの渡来人は……」と記述しているのに対応する記述である。しかし，韓国の教科書では，日本に及ぼしたという「政治的・文化的な影響」の具体的内容については述べていない。百済と日本との関係については，「2．三国の対外抗争と統一」や「3．三国の社会と文化」でも触れられているので当該箇所で再論する。

「六伽耶」の項では

> 伽耶では鉄の生産が多く，早くから鉄器文化が発達した。生産された大量の鉄は，海上を通って楽浪・帯方と日本等の地へ輸出した。
>
> 六伽耶の勢力は，初期にはとても強盛で，新羅を脅かすほどで，日本地域にも進出してその文化を伝播させた。（P28）

と，弁韓のところでも述べた鉄の話と日本への文化の伝播について記述している。日本人の中には，「日本地域にも進出して」の「進出」という言葉に違和感を抱く向きもあるかもしれない。けれども，「文化」はそれ自体が一人で伝わっていくものではない。文化を伝達する人間という媒介によって伝えられていくのである。要は，この人間の移動をどのように見るか、という歴史観の問題にかかわることがらなのである。韓国側は，伽耶の優れた文化を日本へ送り出した方であって，その優れた文化

を持った人々が，日本に強制されてではなくて，自発的に日本へ渡っていったと考えているのである。

これに対して日本側は，文化を受け入れた，あるいは文化が伝わってきたという言い方をしていて，文化を伝えた人々の位置付けが不明確である。伽耶地方とは，日本の教科書では「任那日本府」の所在地とされている所である。日本のある教科書は，日本の伽耶諸国に対する支配と文化の受容を次のように述べている。なお，日本では，伽耶を加羅と表記している。

大和政権は，小国にわかれたままであった加羅諸国（任那）への兵を出して，百済と結んでしばしば他の二国と戦った。その結果，多くの鉄を手に入れ，多数の技術者をつれて来た[18]。

この教科書によれば，鉄や技術者は，大和政権の軍事行動によって獲得されたものとされている。「進出」したのは日本側であって，文化はその結果として獲得されたものだというのである。近代になってからの，日本による植民地朝鮮からの富の収奪と，労働力として朝鮮人を強制連行したことを連想させる記述である。が，これが大方の日本人の胸中にある偽らざる歴史観ではないだろうか。

もとより韓国では，「任那日本府」の存在はおろか「任那」という名称すら認めていない。「伽耶の諸国家」「六伽耶」と述べるだけである。日本が「任耶日本府」の根拠とするのは『日本書紀』の欽明二年四月条などであるが，韓国の教科書は『日本書紀』を一顧だにしていない。日韓双方が，伽耶（加羅）諸国と日本との間に接触があったことを認めているにもかかわらず，両者の理解が全く正反対であるのは，どうも近代以降の両国の関係が大きく影響しているようなのである。そのことは，前述の日本の教科書の例で言えば，一方で技術者の強制連行を言いながら，そのすぐ後では「渡来人」という用語を使用していることにあらわれている。この教科書の記述のしかたでは，「渡来人」を「帰化人」と置き換えても何ら不都合はないのである。「帰化人」という言葉を使うと，植民地史観の悪しき残存という批判をうけるので，それを嫌って「渡来人」と称しただけではないのかとさえ思えるのである。韓国側の任那問題完全無視の教科書の記述態度に直面するとき，日本における古代史教育のあり方を，相当考え直さねばならないのではなかろうか。

しかし，韓国側も，『日本書紀』の中に自国の歴史に深く関わる記事が豊富にあるのであるから，これを全く無視するのはどうであろうか。韓国の教科書を一読してみた感想は，かなり詳しい記述をしているとは感じるが，地図，写真以外の史料が極めて少ないというものであった。特に，史実を知る上で大事な史料が余り紹介されてなく，また，結果に至るまでの考え方の道筋を示すというよりは結論のみを記述しているとも感じた。日韓の相互理解が深まれば，そして互に相手の国の歴史を虚心坦懐に見，そして尊重することができるようになれば，このような溝は自ずから埋められるだろうという楽天的希望を，今は述べるにとどめおきたい。

この単元の学習整理では，次の２点が日本に関係している。

２．百済は３世紀，古爾王時代に古代王国の基礎を整え，４世紀になって遼西・山東地方と日本地域にまで勢力が及んだ。

４．伽耶は鉄器文化をもとにして，日本にまで勢力圏を形成した。たとえ古代王国には発展できなくとも，伽耶文化は新羅文化に大きな影響を与えた。（P29）

日本にまで及んだという百済の勢力，日本が含み込まれる伽耶の勢力圏の具体的説明，あるいはそ

のような説の根拠などは，本文でも述べた如く，全く説明されていない。

ところで，この単元中の，「広開土大王と長寿王」の項で指摘しておかなければならない問題がある。それは，日本では統一国家形成期における対外戦争としてよく知られた，高句麗好太王碑文に記された辛卯年の倭の朝鮮半島への派兵のことである。

高句麗は，4世紀に入って南進を開始し，百済との衝突で故国原王が戦死したりしたが，着実に国力を高めていった。そうして，

> その後，広開土大王は，強化された国力を以って，大々的な領土拡張事業を広げていった。粛慎を服属させ，遼河東方の満州の地を占領し，南方へは百済を攻撃して漢江以北を占領した。また，5万の軍士を派遣して，新羅を侵犯した倭寇を撃退もした。（P25）

広開土大王の事績の中の「5万の軍士を派遣して，新羅を侵犯した倭寇を撃退」したというのが，日本の教科書には必ず記されている391年の高句麗軍との交戦のことである。「新羅を侵犯した倭寇」と，あたかも倭の単独的な軍事行動であるかのように述べられているが，これは不正確な記述と言わざるをえない。なぜなら，広開土王碑によれば，「百残新羅は，旧是れ属民にして，由来朝貢す。而るに倭は，辛卯の年を以て来りて海を渡り，百残・□□・新羅を破り，以て臣民と為す[19]」という事態に対処して，広開土王十年（400）に「歩騎五万を遣わして，往きて新羅を救わしむ」ということになるのであるが，実はこの前年の「九年己亥，百残，誓いを違えて，倭と和通す」という記事を韓国の教科書では無視しているからである。4世紀末から5世紀初にかけての「倭寇」は，高句麗・百済・新羅三国の対立抗争に倭が介入したものだったのである。この点，日本の教科書では，「5世紀のはじめに建てられた高句麗の広開土大王（好太王）の碑には，王が百済と結んだ倭の軍隊と戦い，これを破ったことがしるされている[20]」「大和国家は，小国が分立したままであった加羅（任那）地方の国々に勢力をのばし，百済と結んで，高句麗や新羅と戦った[21]」と，百済と同盟した軍事行動であったことが理解できる記述になっている。

このように，広開土大王碑に記された倭軍の半島出兵は，三国間の政治的関係ならびに軍事情勢と密接な関係があるのだから，韓国としても，教科書でそのことに触れるべきであろう。今強いて韓国側の事情を忖度してみると，4世紀末の倭の軍事行動が神功皇后の三韓征伐伝説と結びつけられて，日本の植民地支配に歴史的根拠を与える役割りを果したことに対する嫌悪感が大きく作用しているのだと考えられる。しかし，この問題は，前述のように，韓国史そのものなのであるから，「倭寇」に関する記述の改善を望みたい。

とは言え，ここでもまた近代日本の植民地配の影が色濃く差し掛けているのである。

2．三国の対外抗争と統一

学習概要では，高句麗・百済・新羅三国それぞれの発展と抗争，そして新羅による半島統一が概観されている。学習問題は

1　百済は沃沮地方にどのように進出できたのか？

2　高句麗は隋・唐の侵略をどのように克服したのか？

3　百済と高句麗が滅亡した理由は何か？

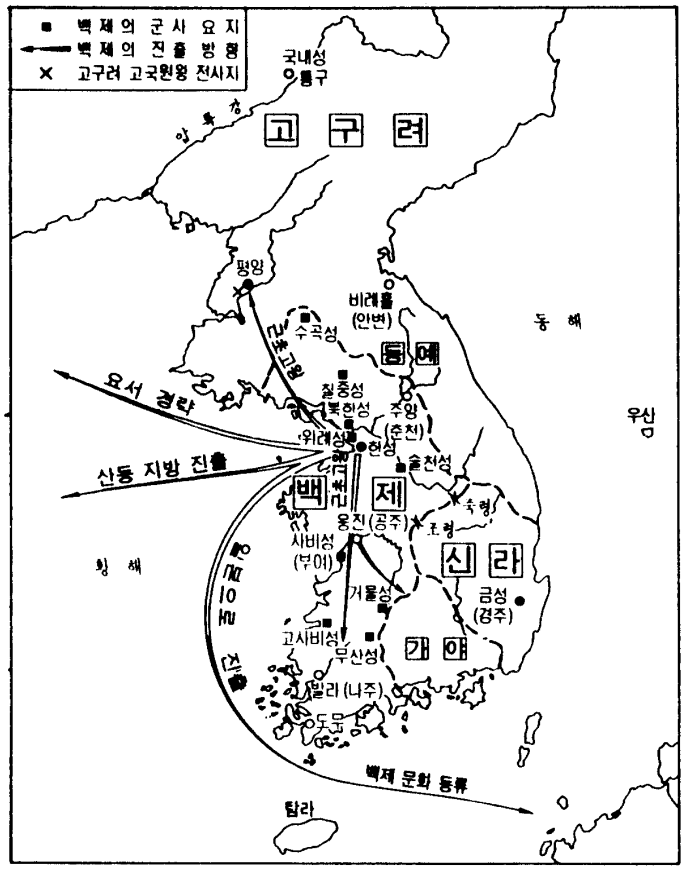
4　三国の中で最も遅く発展した新羅が，どのようにして三国を統一することができたのか？

5　新羅は唐の勢力をどのようにして追い出すことができたのか？（P30）

という5つの課題が設定されている。この単元のねらいは学習問題4に見られるように，新羅による半島統一の過程を学ぶところにある。

日本に関する記述は「百済の海外進出」の項に見られる。この項には「百済の海外進出」という参考地図（図1参照）が添えられ，百済から日本へ引かれた矢印には「日本へ進出　百済文化東流」と注記されている。本文は次のように記されている。

> 4世紀に至り，高句麗が中国と激烈な衝突を続けていた時，百済は馬韓勢力の併合に拍車をかけていた。
>
> 遂に馬韓を完全に征服して国家体制を整えた百済は，4世紀中葉，中国の晋が弱化した隙に乗じて沃沮地方にまで前進した。これは当時の高句麗の遼東進出に匹敵するものである。この時，百済人たちは，山東地方と日本のいろいろな地方にまで進出した。



（図1）百済の海外進出

> 中国に進出した百済勢力は，5世紀中葉以後高句麗の南下と中国勢力の抵抗で萎縮した。しかしこれは百済人の旺盛な海外進出の一つの様子を見せてくれるものである。（P31～32）

挿図を参考にすると，百済が日本へ進出したということは，百済文化の伝播を意味するらしい。しかし，山東への進出も日本への進出も，どのような史実を以ってそう言っているのか，またどのような史料にもとづいているのかは全く明示されていないのである。「この時」というのは，文脈から見て，4世紀中葉以降ということになるが，この時期は日本では古墳時代に相当する。日本の教科書では，この時期に渡来人が多くやって来て，土木・鍛冶・養蚕・機織・製陶の技術を伝えたことを記している。しかし，百済だけから渡来人が日本へやって来たとは述べていないのである。4・5世紀頃の倭と百済が高句麗や新羅とよりもはるかに親密な関係にあったことは，『三国史記』百済本紀の記事によって知ることができる。同書新羅本紀には倭との交戦記事が多く見られることと比較すれば，倭と百済の親密さは際立っている。もっとも日本の教科書でも，『三国史記』をもとにして百済との関係を説明してはいない。

韓国の中学校における国史教育の教科目標は，1981年の教育課程に[22]よれば，

韓国史の発展過程を主体的な立場で把握し，わが歴史の正統性を認識し，新しい民族文化発展に寄与させる。

①韓国史の流れを体系的に把握し，進んで各時代の史実のもつ意味を正しく理解させる。(以下略)

となっている。

「各時代の史実のもつ意味を正しく理解させる」ためには，ただ結論だけを示すのではなくて，結論を得るにいたるもととなる史料をも提示すべきである。これまでに読んできたところでは，「各時代の史実」を理解するより「主体的な立場」の方が優先させられているように見受けられる。

さて，6世紀末になると，隋が中国を統一し，続いて唐が大帝国を現出させた。半島の三国も中国情勢の影響をうけて大きな展開をみせる。盛んになってきた新羅に対抗して，高句麗と百済が同盟を結ぶ。隋は高句麗攻撃に失敗して滅び，隋に代って登場した唐は，高句麗・百済連合に脅威を感じた新羅と連合する。こうして，唐と新羅の連合軍の攻撃によってまず百済が，つづいて高句麗が滅亡したのである。

百済の滅亡については，次のように記されている。

新羅が漢江流域を占領するや，高句麗と百済はともに同盟して，新羅をたびたび攻撃した。苦境に陥った新羅は，金庾信をもってこれを防がせる一方，唐と同盟を結んだ。

この時，唐は高句麗侵略に何度も失敗したあとで，方法を転換し新羅を助けるふりをしながら，百済・高句麗を次々と侵略した。

一方，百済の義慈王は，新羅に対して軍事作戦をしばしばおこし，無益に国力を消耗していった。この隙に乗じた新羅軍は，唐軍と連合して百済を功撃した。この時階伯が率いる百済の決死隊は，新羅軍を迎えて黄山の原で勇敢に戦ったが敗れてしまった。つづいて，羅唐連合軍に泗沘城を陥されて，百済は滅亡した。(660)（P34）

かくして百済が滅亡したのであるが，その後も鬼室福信や黒歯常之および僧道琛らが粘り強く百済復興の戦いを継続した。福信らは，日本に人質として派遣されていた王子余豊璋を王として迎えようとした。そこで日本は，余豊璋に援軍を付けて帰国させたが，新羅と唐の連合軍と白村江で戦って大敗北し，百済再興は不可能となったのである。この百済復興運動については，次のように記している。

百済と高句麗が滅んだ後，昔の領土では復興運動が根強く起ってきた。

もとの百済の地域では，福信・道琛・黒歯常之と王子豊が復興運動の先頭に立って進み，一時その勢力が非常に優勢になったが，指導層の間に内紛がおこって成功させられなかった。（P35）

百済復興運動とその終焉の際の日本の関与，及び多数の百済王族と臣民の日本への亡命については，前述の森浩一氏の指摘の如く，全く言及されていない。白村江の敗戦は日本に大きな衝撃を与え，大宰府を海岸線から離れた場所に移して，水城や大野城を築いたのをはじめ，瀬戸内海沿岸地域にも朝鮮式山城を多数築いて防禦体勢を固めるなどしたのである。とはいっても，白村江の敗戦は，日本にとってのみ歴史的な意味をもつというものではないはずである。百済滅亡の際の日本の関与無視の姿勢は，先程からくり返し述べているように，これも日帝支配時代に反発した「主体的立場」のなせる

わざであろう。それは，唐と新羅の同盟に関する記述を見ても明らかである。

唐•新羅同盟については，「唐は……新羅を助けるふりをしながら」と記して唐の半島全域支配の野心を明らかにしている。それならば，日本による百済救援の大軍派遣についても同様に「日本は百済を助けるふりをして」と書けばよさそうなところを，全くそうはしていないのである。唐・新羅・百済・高句麗・日本の５カ国をまき込んだ７世紀後半の東アジア史上の事件は，韓国の「国史」としても大事件である[23]。またまた，古代史の記述の態度に日韓の近代史が影をおとしているのである。

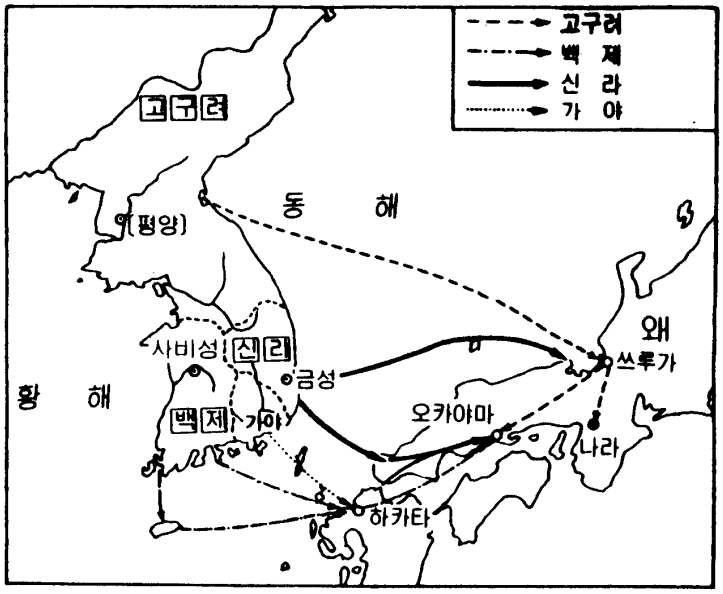
３．三国の社会と文化

ここでは，高句麗・百済・新羅の社会と文化について概説されている。日本との関わりは，これまでで最も豊富に記述されている単元である。例えば，「学習概要」で「三国の学問と芸術は日本に伝わって，日本文化の発展に大きな影響を与えた」と述べ，「学習問題」では「三国の文化はどのように日本へ伝播され，その影響はどのようにあらわれたか」と問うている。日本に関する記述は，このように，半島の文化がどのように日本に伝わったかという関心からなされており，本文では「文化の伝播」という項で扱われている。

三国は，互いに対立して競争する中でも，活発に文化を交流した。中国とも交流しながら，独自的な美術を発展させる一方，海を渡って日本に文化を伝え，彼らの文化の基礎を安定させもした。

百済からは，阿直岐と王仁が日本へ渡って儒学を教え，段陽爾・高安茂等も渡っていき学問を教え，聖王時代には仏教を伝えてやって，百済と高句麗のたくさんの僧侶達は日本の仏教界を指導した。

儒学と仏教の他に，美術・音楽・易学・医学と農業などいろいろな技術も教えた。特に，曇徴は紙・筆・墨・硯をつくる方法をはじめて日本に伝え，法隆寺の壁画も残した。日本が飛鳥文化をつくりあげて古代王国に発展することができたのは，三国の文化の伝来を受けることができたからであった。このような史実は，高松塚古墳の壁画をはじめ，さまざまな文化遺品によくあらわれている。（P48）



（図２）　三国文化の日本伝播

以上の如く，三国から日本へ伝播した文化の内容については，かなり詳細に説明を加えている。挿図も添えられており，高松塚古墳の壁画の写真には「日本高松(マツ)県の古墳から出現した壁画で，高句麗古墳の壁画に

似ている」という説明がついている。「三国文化の日本伝播」というキャプションがついた地図（図2参照）には，高句麗・百済・新羅から敦賀・博多・岡山・奈良へ文化が伝わったことを示す矢印が描かれている。高松塚の壁画や文化伝播の地図を掲げていることからわかるように，日本との関係がこれまでになく詳しく記述されている。三国のあらゆる分野の文化が日本に伝えられて，日本の古代王国興隆の原動力となったとされているのである。法隆寺の壁画を曇徴が描いたというのは，わが国では「論外」[24]の説として否定されているが，三国の文化が飛鳥文化の形成に大きく貢献したことは否定できないことである。それでは，日本の教科書は，飛鳥文化と高句麗・百済・新羅の文化との関係をどのように見ているのだろうか。

各社とも，飛鳥文化については，聖徳太子の仏教信仰と法隆寺の建立，釈迦三尊像などの美術工芸品の説明をしているが，半島三国の文化の影響については全く言及していないものがある。また言及はしていても，飛鳥寺を建てた「蘇我氏は，渡来人との関係が深く，仏教など中国や朝鮮の文化をとり入れることに熱心であった[25]」というように，間接的に解説するにとどまっているものもある。さらに各社に共通していることは，飛鳥文化の記述の直前に遣隋使と留学生・留学僧の派遣が記されていて，不注意に教科書を読むと，飛鳥文化は中国の文物や制度を直輸入したものであるかのように受け取りかねない構成になっていることである。遣隋使の派遣以降，当時の為政者が中国文化の直輸入を企てたことは確かであろうが，留学生や留学僧として中国へ渡航していったのは，ほとんどが半島から渡来した人々の子孫であった。寺院建設や仏像の製作に携わったのも，やはり渡来系の人々であった。

ここに，日本の古代文化に対する，日本と韓国の教科書の対照的なとらえ方が明らかとなった。日本の教科書における朝鮮三国の位置付けは，中国をはじめとして，インド・西アジア・ギリシアなどの文化が日本に伝来する際の通過地点の一つである。そして日本に伝来したのは，中国文化を主体とするものであり，半島から渡来した人々はそのような文化を日本へ運んでくる容器の如きものとして描かれているのである。少なくとも，朝鮮半島三国の独自の文化が日本へ伝えられたのだとは，全く意識されていないと断言できよう。

対するに，韓国の教科書では，三国の文化は中国の文化の影響を受けつつ各国が独自に発展させたものとしている[26]。そして，この単元の学習整理においても「三国の文化は日本へ伝播されて古代日本に大きな影響を与え，飛鳥文化の成立に大きく貢献した」と記されているように，古代日本は，すでに高い水準に達していた三国の文化を受容する客体としての地位を与えられているのである[27]。今の教科書は，以前の教科書と比べると，日本に関する記述が大幅に増加している由であるが[28]，古代日本に対する見方に変化は認められない。

日本の教科書の側に，古代朝鮮の文化を正当に評価する姿勢が薄弱であるとするならば，韓国の教科書には，古代日本との政治・外交関係への言及が皆無である。

第3節　古　　代　(二)

III. 統一新羅と渤海

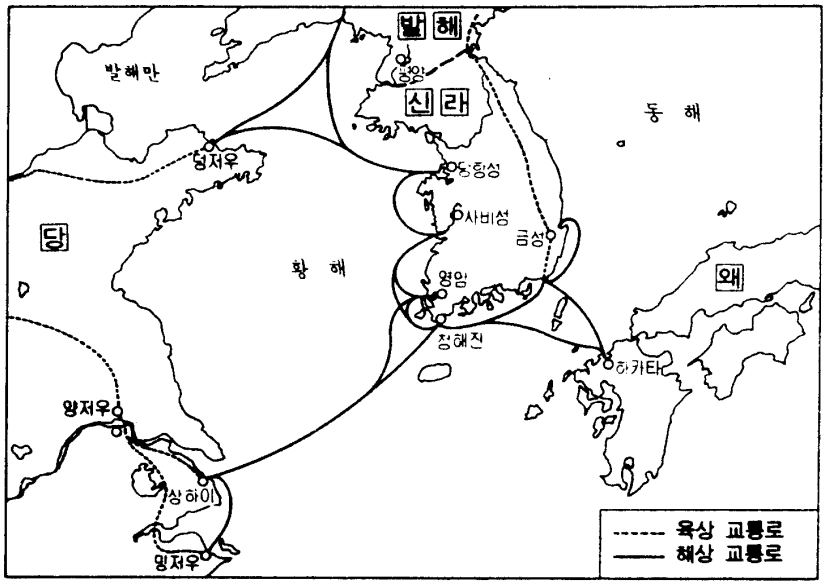
1．統一新羅の発展
2．渤海の満州支配
3．民族文化の隆盛
4．新羅末期の社会変動

1．統一新羅の発展

百済・高句麗の滅亡後，唐は旧百済の地に熊津都督府を，旧高句麗の地には安東都護府を設置して，半島を占領支配しようと企てた。これに対して新羅は，旧高句麗領内の抵抗運動を支援したり直接唐と戦ったりして，唐の勢力を遼東へ追い出すことに成功し，とうとう半島の統一を成し遂げた。新羅が唐と戦いつつ半島統一に邁進していたこの時期，日本との関係を改善するために，日本へ貢調使を送ったりした。このため，一時的には日本と新羅間の外交関係改善の兆しも見られたが，8世紀の両国間の関係は概ね低調であった。両国間の往来，特に新羅人の来航は増加するが，それは政治的な使命を帯びた使節というよりは，交易を目的とした商人が主体となったものであった。

このような，日本・新羅の冷たい外交関係を反映して，教科書の日本関係の記事は少ない。が，「統一の意義」を述べたページには「大王岩」の写真が載せられていて，「文武王の海中陵である。倭寇を阻止して，国を守護せんという文武王の遺言にしたがい海に葬った。慶北月城郡前面の海所在」というキャプションが付いている。これは，『三国史記』新羅本紀，文武王21年（681）7月1日条に，「王薨。謚曰文武。群臣以遺言。葬東海口大石上。俗伝王化為竜。仍指其石。為大王石」とあるのや，『三国遺事』に，東海を望む地に建立された感恩寺をめぐる，「文武王欲鎮倭兵。故始創此寺。末畢而崩為海竜」「第三十文武王。……陵在感恩寺東海中[29]」という伝承に基づくものである。文武王は在位661年から681年で，白村江の戦いの後の，日本と新羅の緊張関係の中で，唐の勢力を半島から駆逐して，半島統一を進めた王である。そのような王が，倭兵を鎮めるために東海（日本海）の海中の岩に葬るよう遺言し，さらに死後竜となって国を守ろうとした，という伝説を生んだのである。教科書の本文は何も語らないが，このような所から，この時期の日本と新羅との関係が読みとれる。

「海上貿易」と題する項になると，日本との関係が説明されており，「統一新羅の海上貿易路」という付図（図3参照）でも，新羅との交易地として，博多があげられている。



（図3）統一新羅の海上貿易路

8世紀に入ると，新羅と唐との関係は修復され，新羅から唐へ多くの留学生や留学僧が派遣され，唐との文化交流が盛んになる。そして，日本とも交流が行われた。

また，日本との交流も，漸次広がっていった。

新羅の唐・日本との貿易は，最初は国家間で行われる公貿易が盛んであったが，漸次民間貿易も増えていった。紵布・人参・金銀細工品等を唐へ輸出し，唐からは，絹・本・官服・薬剤等を輸入した。貿易路は全羅南道霊岩，京畿道南陽湾から中国の江蘇省・山東半島方面へ行く海路があった。そして，日本とは南海岸から対島を経由として往来した。（P54～P55）

記述の重点は対中国貿易に置かれているが，日本との貿易についても，上述の如く，言及されている。決して十分な量の記述とは言えないが，公貿易から民間貿易への変化，南海岸から（付図には，金城・清海鎮の名が書きこまれている）対島を経由する貿易ルートが解説されている。新羅・日本間の貿易品について本文では何も語っていないが，学習整理では，「統一新羅は，積極的に海外進出にのり出して，唐と日本の中間貿易に利益をあげた。そして，新羅人達は唐に新羅坊・新羅所・新羅院を置いた」と述べている。これによれば，新羅商人は唐の文物を日本に仲介したのである。また，日本との貿易について言及されたのは，唐に新羅坊などを設けるほど新羅人が海外へ雄飛したことを説明するためであったこともわかる。なお，日本の教科書は，統一新羅時代における日羅貿易について全く述べていない。

2．渤海の満州支配

高句麗が滅亡した後，高句麗の故地満州では，高句麗の遺民が粘り強く復興運動を続けていた。大祚栄（高王）は，高句麗遺民と靺鞨族を率いて，東牟山に拠って国を建て，震国と号した。高王は，その後唐から渤海郡王に封じられたため，国号を改めて渤海とした。渤海は，元来唐の領土内で建国したため，常に唐とは緊張関係にあった。また，南は新羅とも堺を接していたため，これに対する注意も怠るわけにはいかなかった。渤海は，唐・新羅に対抗するために，唐に対しては突厥と，新羅に対しては日本と結ぼうと企てた。そのため，日本へたびたび遣使を行った。したがって，この単元では，「渤海と唐」の項で，日本との関係が説明される。

渤海は，当初高句麗継承意識をはっきりと持っていて，日本との外交文書でも高句麗王とするほどだった。そうした理由で，渤海と唐との関係は良くなかった。唐は，新羅・靺鞨族などを利用して，渤海を牽制しようとしたが，渤海は突厥と日本へ使臣を送り，それらと手を結んでこれに対抗した。また，渤海の武王は，海軍を派遣して唐の登州を攻撃させもした。しかし，文王以後から，渤海は唐と平和を維持して活発に往来しながら，その文化を受け入れた。（P58）

日本に関しては，かくの如く，はなはだ簡単な記述である。しかし，渤海・新羅・唐・突厥間の国際的緊張関係の中に日本も巻き込まれていたのであって，また実際，藤原仲麻呂政権下で新羅征討のことが計画されたことがあったのである[30]。日本と渤海との関係は，次第に政治的な意味を失ってゆき，後には交易が主体に変化する。渤海との関係について日本の教科書でも，政治的にも商業的にも記述は少ない。韓国の教科書の記述はどうあれ，われわれは，東アジア世界の一員としての日本，と

いう視点を忘れてはならないだろう。正倉院の宝物の国際色の豊かさばかりを強調するのではなく，国際政治の観点ももっと日本の教科書は導入すべきであると考える。

「渤海の文化」の項でも「漢学も大いに発達して，唐へ行って科挙に合格する儒学生が多かったが，また日本へ行って名声をあげもした」と記述されているが，日本で名声をあげたことの具体例は示されていない。おそらく，渤海国使と日本の文人たちとの詩文の交換をいうのであろう。

3．民族文化の隆盛

ここでは，統一新羅時代の文化を，統一以前の三国時代の文化を統合した，民族文化として位置付けて，その盛んな様子を記述している。

仏教では，五教九山の隆盛と仏国寺・海印寺・浮石寺・華厳寺の建立，元暁・義湘ら僧侶の活躍が紹介され，また，神文王の国学・景徳王の太学監設立，強首・薛聡ら学者の輩出，吏読の発達など学問的な面での発展も記述されている。

このように高い水準にまで発達した新羅の文化が日本へ伝えられて，それがどのように作用したかが，「統一新羅文化の日本伝播」で語られている。

> 日本は，すでに三国の文化を受け入れて，その文化を発展させた。その後，統一新羅時代にもたびたび使節を送ってきて，発展した新羅の文化を受け入れた。統一新羅の文化は，政治制度・律令をはじめとして，仏教・儒学・芸術等，文化の全般にわたって，日本に大きな影響を与えた。日本は，このような統一新羅文化の影響と，唐の文化をもとにして，古代王国の国家統一と文化の発達を成し遂げることができた。（P66）

なお，1979年版教科書では，この単元は「3．統一新羅の文化と社会の変動」であったが，1987年版では，「3．民族文化の隆盛」と「4．新羅末期の社会変動」の二つに分割され，1979年版には，「統一新羅文化の日本伝播」はなかった。これを見れば，日本に関する記述が，少しづつではあるけれども，増加している様子が伺える。ただし，ここでも，記述される内容は文化面に限定されている。

ところが，日本の教科書では，この時期における新羅との関係については，全く言及するところがないのである。文化面における新羅の寄与という記述は，根拠のないことではない。例えば，天平12年(740)，東大寺の前身といわれる金鐘山寺において，良弁僧正が新羅から来日した僧審祥を請じて，はじめて華厳経を講じている[31]。天平文化の代表ともいうべき大仏が安置された東大寺は，華厳経を根本経典とする華厳宗の寺院である。その華厳経をはじめて金鐘寺で講じたのが，新羅人の僧だったのである。このような事実を見るとき，韓国の教科書の記述は，こと日本に関しては，あまりにも文化の伝播に片寄りすぎているとはいうものの，日本の教科書が反省すべきことをはっきりと指し示していると思うのである。

小　　結

以上，先史時代と古代史の記述の中で，日本との関わりがどのように描かれているかを概観し，時には日本の教科書の記述との比較も行った。

その結果明らかになったことは，一貫して，日本は，朝鮮半島の優秀な文化の受容国としてのみ描かれているということであった。そして，政治・外交・軍事に関しては，完全に無視するかあるいはそれに近いものであった。近年は，日本に関する記述が増えているとはいっても，記述の基本的姿勢は変化していないようである。百済再興運動の際の日本の関与などは，韓国の国史として無視してはならないことがらである。韓国の教科書を通して見る日本の歴史像は，正直に言って，歪んだ歴史像であると言わざるをえないのである。しかし，翻って日本の教科書を見るならば，こちらは古代朝鮮の文化が古代の日本に果した役わりについて，必ずしも正当に評価しているとは言えないし，また東アジア世界と日本との関係に対する配慮も十分とは言いがたく，これまた歪んだ歴史像であると言わざるをえない。

韓国の教科書の記述内容が，過去における日本と朝鮮との暗い関係の反映であるならば，まず日本の歴史教育の中で，正しい日本と朝鮮との関係を教えることによって，日本人側の意識の変革をはかりつつ，韓国側の対日姿勢の改善を期待するしかないだろう。

なお，最後に一言付け加えておきたいことは，高松塚を「高松県」所在とした誤りや，法隆寺金堂壁画の作者を曇徴とする根拠不確実な説は，早急に訂正されたいということである。日本の教科書にも，同様の誤りがあるかもしれない。お互いに事実を大事にして，実証的に歴史を見ていくべきであると考える。

注

(1) 中学校用の国史科教科書の日本語訳。

① 渡部学編訳　村上四男増補『韓国史』（大学堂書店　1982．4）本書は1976年1月10日発行『中学校　国史』の翻訳。

② 渡部学編訳　高島淑郎訳　『韓国：1』（世界の教科書＝歴史013중학교국사，ほるぷ出版，1982．8）本書は1981年版を翻訳したもの。

この外に，未だ一読する機会がなかったが，渡辺学編訳『韓国の中学校国史教科書』（図書文献センター，1977）がある。

(2) 前注②書の編訳者序による。

(3) 独立記念館の開館一週間後に訪韓したが，大田市・井州市・光州市・大邱市の駅や市街地には，独立記念館への見学を呼びかけた看板や横断幕が見られた。テレビでも，国歌をバックに独立記念館の建物と独立運動に献身した人たちの顔を次々に写し出す，独立記念館の広報がくりかえし放映されていた。開館直後という事情があるにせよ，国民教育の一つとして寄せられた期待の大きさを実感した。

(4) 東亜日報7月30日「きたる二学期から中高生に対する教育が強化される。〔中略〕各市教委で準備中の日帝侵略史にかんする教育強化法案は，歴史教科書の内容中，日帝侵略部分だけを抜き出して別途の教材を作り，教育を強化することと，今回の夏休みを利用して，各地域別に実施する教員研修課程にもその内容を入れることだ。これに伴いソウル市教委は文教部資料を土台に教材を準備する作業に着手，夏休み中に教材を完成して，教師用指導書にこうした内容を入れ，二学期から強化された教育を実施させることにした。」（田中明『韓国の「民族」と「反日」』朝日文庫，1988　P119による。）

(5) 『中学校　国史』（1987年版）からの引用は，引用文の末尾に該当するページ数をカッコに入れて示すことにする。

(6) 考古学者の森浩一氏は，韓国の中学校国史教科書の問題として，「たとえば，四世紀とか五世紀の，日本の歴史でいう任那とか，その時代のことは別にしても，少なくとも，百済滅亡のとき，日本が百済を応援して出兵したことは『唐書』にも出ていて，歴史的事実なのです。そして，白村江で日本水軍が大敗した。そのことが新羅の統一につながるわ

けですが，韓国の教科書には，日本が関係した事実を全く書いていないんです」と述べている。（鮮于煇・高柄翊・金達寿・森浩一・司馬遼太郎『日韓理解への道』収所の座談会記録「歴史教育と教科書」中公文庫1987．12）

中学校の段階でどの程度詳しく教えるべきかという教育的配慮が必要であるから一概には言えないが，森浩一氏が言われるように，記述の省略に関して釈然としない部分が時に認められる。この点については，三国時代の日本と三国との関係で再論したい。

(7)　渡辺誠「海を越えてきた土器」（『古代史発掘2　縄文土器と貝塚　縄文時代1』講談社1973）は，ソウル市内を流れる漢江河畔の岩寺洞遺跡・釜山市影島区の東三洞貝塚などから出土した尖底に近い円底の深鉢土器は，煮沸用具として使う際の火熱による亀裂をふせぐために，石綿・滑石などの粉末を粘土にまぜてから土器を成型し，焼きあげてあるが，同じ技法の土器が対馬・壱岐・五島列島を経て縄文早期末から前期初頭に西九州へ波及し，西九州地方の前期初頭の文化に強い影響を与えたことを述べている。

江坂輝「生活の舞台」（『日本の考古学III縄文時代』III「縄文時代の生活と社会」河出書房1965）も，縄文早期における朝鮮半島との文化交流の存在について，半島のものと類似した土器が西九州地方で出土していることを根拠にして論じている。

(8)　金達寿・姜在彦・李進熙・姜徳相共著『教科書に書かれた朝鮮』P21～P22「縄文・弥生時代と朝鮮」（講談社1979，4）

(9)　現存する国家ではなくて，歴史的に半島地域を表現する場合，および引用するときや参考にした文献に朝鮮とある場合にはこの用語を使用する。

(10)　文化の動きが半島から日本列島への一方通行でなかったことは，韓国の釜山市影島区東三洞遺跡から日本の縄文土器片が出土していることを見ても明らかである。韓国国立中央博物館の図録（国立中央博物館編『**국립중앙박물관**』1986）の東三洞遺跡出土遺物についての説明文中には「南海岸地方の新石器文化を編年する標準遺跡として，新石器時代初期から末期に続く全期間にわたって形成された遺跡である。まん中の層から出土した日本の縄文土器片と混っていた黒曜石材等は日本から来たことが明らかになって……」とある。

大筋としては，日本が大陸や半島から文化を受容したのであるが，縄文時代にすでに双方向の文化交流があったことを日韓共に認識して教育に生かすべきであると考える。

(11)　「国家生活」は原本のハングルによる表記「**국가　생활**」をただ漢字に置換したたけである。

(12)　石井紫郎『日本人の国家生活』（東京大学出版会1986．11）はしがき

(13)　この箇所は，1981年版（注(1)の②書）では「そして，これらの青銅器をもたらした人々が，新しい社会をつくりつつ民族の主流を形成して，私たちの歴史に登場してくることになる」（P26）となっていて，表現が穏かである。

(14)　注(8)書P56，金達寿「古代国家の形成と『帰化人』」

(15)　現在は各社の教科書とも帰化人の用語を避けて「渡来人」と表記しているが，何故「渡来人」と書くのか理由を説明していない。東京書籍『新編新しい社会（歴史）』では，「大和国家と朝鮮の諸国との交わりがさかんになると，朝鮮から日本に移り住む人々が増えた。これらの渡来人は……」と記述している。松尾光氏は単純に「渡来人」とすることに疑義をはさみ，「ある歴史的段階での思想表現として『帰化』の語は要ると思う」とのべている（「検証『帰化人』と『渡来人』」『歴史読本』1988．12）。

(16)　『中学社会　歴史的分野』（日本書籍）

(17)　注(16)書P45

(18)　注(16)書P44

(19)　以下，広開土王碑文は，佐伯有清編訳『三国史記倭人伝』（岩波文庫1988．3）による。

(20)　『改訂中学社会』（教育出版）P37注①

(21)　『新編新しい社会（歴史）』（東京書籍）P32。

(22)　1981年12月31日付文教部告示第442号。森田芳夫『韓国における国語・国史教育』（明治百年叢書第383巻，原書房1987，12）所収の資料による。

(23)　663年の白村江における日本と百済の連合軍の敗戦について，韓国では，教科書以外の一般向けの歴史概説書でも重視していないようである。例えば，一冊本の韓国史概説である河炫綱著『韓國**의**歴史』（新丘文化社，1979．2．15，**서울**市）では，百済と高句麗の滅亡を述べた後に「百済と高句麗の滅亡後その遺民たちは終始一貫して熾烈に復興運動を起こした。特に百済の王族福信と僧侶の道琛，そして黒歯常之，高句麗の王族安勝と剣牟岑らが，長い間，粘り強い

闘争をつづけたことをわれわれは知っている。しかし，滅ぼされた王朝を再建するという目標は達成できずに終った」と記すのみである。巻末の年表も，百済滅亡の年を660年と記すのみで，余豊璋が王位についた事実（『日本書紀』『新唐書』『三国史記』で確認できる）は全然言及されておらず，663年の白村江の戦いも記されていない。

(24) 林良一「金堂舊壁畫」（『奈良六大寺大觀』第五巻法隆寺五所収解説　岩波書店（1971．9）では，金堂壁画の製作者として鞍作鳥・黄書本実・道慈らの説があるが，いずれも確証はなく，「推古十八年（610）に来朝した曇徴などという説は論外である」と述べている。法隆寺の再建年代からみてもそのとおりであろう。作者曇徴説については同書の注49に「曇徴の説は古記録になく，春山武松『法隆寺壁画論』によれば，明治初年の法隆寺の案内記風なものに始まる憶説であろうという」とある。

(25) 注(20)書P43。

(26) この単元では，「仏教と道教」「詩歌と風俗」「古墳美術」「石塔と工芸」といった項を立てて，独自文化のすばらしさを解説している。中国から伝わった漢文についても，「漢文と吏読」という項で「わが国へ漢字が伝来されたのは古朝鮮末期からのことだが，三国時代に入っては活発に使用された。（中略）漢字の音に従って国語を表記しようとする努力もあったが，のちに新羅の薛聡はこれを体系的に研究して吏読を発展させた」と，漢字を用いた国語表記の工夫を語っている。

(27) 稲葉継雄「韓国の学校で教えられている日本の虚実」（『知識』第26号1982．4）によれば，韓国の教科書の中での日本の位置付けは，「古代における文化受容者，中世から近代における侵略者，将来のパートナー」というものだそうである。（注(22)森田芳夫書の引用による。）

(28) 注(22)書P218。

(29) 『三国史記』『三国遺事』とも注(19)書による。

(30) 『続日本紀』天平宝字三年九月壬午条，同五年正月乙未条。

(31) 『東大寺要録』第一本願章，第五諸会章